A case study on What Aspects of Commuting Long-Term Care Give Pleasure to Its Users.

Gota Kimura and Kazuyuki Koike

Abstract

The purpose of this study was to inspect activities of the commuting long-term care (day service) and the pleasure of day service users. It was the one which tries verification based on the case about the relation between the day service and the pleasure from there.

The subjects were 17 users in the Y day service center which is in I city of the M Prefecture.

The investigation executed two hearing tests to the day service users. The first test assumed 14 of servicing scenes of the day service. In the each of the 14 scenes, users noticed pleasure in the scenes. The second test investigated which of the activity of the day service or the human relation day service users makes much of day service.

Consequently, (1) the Y day service users noticed pleasure in most servicing scene. (2) The elements of the pleasure at the day service users seem to give 4 elements extracted. It was "person", "space", "the service activity", "the others". Also, the elements of the pleasure at the elderly seem to suffocate 3 elements extracted. It was "the healthily facing anxiety", "loneliness", "the loss of the worth living sense". (3) It was possible to understand that the Y day service users thought both between the activity and human relation and balances two well.

Finally, pleasure feelings of the day service users brought the mutual relationship of the other users and the staffs. We think that the pleasure feelings of the elderly confused they coexist when a wide range of factors are pleasant in the relation with others.

Key words: pleasure, commuting long-term care, day service
I. はじめに

1. 研究の背景（わが国の高齢者通所介護サービスの現状）

日本の65歳以上の高齢者人口は、平成18年高齢社会白書によれば、過去最高の2,560万人となり、高齢化率も20.04%と、初めて20%を超えた。高齢者の増加に伴い、今後も高齢者の居る世帯、一人暮らし高齢者は増加を続け、家族や高齢者自身にかかる負担が大きくなくなっていくことが予想されるもの。

そこで、これらの課題を解決すべく2000年4月から導入された介護保険制度は、現在9年を経過し、先々の安心を支える仕組みの一つとして一定の役割を果たし、広く認知されてきたことがわかった。しかし、制度の実施とともに、当初の予想を超える介護保険の総費用の増大や、急速な高齢化などの影響により、制度の持続性が課題となっている。これらの社会的背景を基に、2006年4月に介護保険制度が大幅に改正された。この改正により、従来の介護をするサービスから、介護を受けない「介護予防」を重視した、新たな介護に対するコンセプトが打ち出された。

通所介護サービス（以下デイサービス）は、様々な障害を有する高齢者が利用している。要介護度が、要支援1から要支援2、要介護1から要介護2までと、障害の程度も異なる。

今回の改正で、デイサービスで、新たに「介護予防」を重視したサービスが提供されることになった。これは、軽度（要支援1）から要支援2、要介護1）の利用者を踏まえ、できる限り要支援・要介護状態にならない、あるいは、重度化しないようにすることが最大の目的である。

また、認知症高齢者や一人暮らし高齢者が増加している現状、住み慣れた地域で、地域の特性に応じて柔軟なサービス提供が可能となるよう新たなサービス体系として「地域密着型サービス」が創設され、今まで以上にサービスの多様化が求められている。今後、増え続ける高齢者により良いサービスの提供するために、地域が一丸となって、高齢者福祉サービスの質の確保と向上が求められている。

新システムとして考えられた介護保険制度は、介護を要するものが、能力に応じて自立した日常生活を営むことができるように、必要なサービスを保険給付によって提供し、国民の保健医療の向上及び福祉の増進を図ることを目的としている。

介護予防サービスでは、従来から要支援の高齢者には「介護給付」によりサービスが提供されていたが、これらのサービスが軽度の状態の改善・重度化防止につながっていないことや、サービスメニューが要介護者と同一のサービスであることが問題視されていた。

このため、2006年4月に施行された介護保険制度改正により、新たに予防給付が再編された（図1）。

このほかにも、今回の介護保険制度改正で、認知症の居宅要介護者に通所介護施設に通わせ、入浴、排せつ、食事などの介護その他日常生活上の世話及び機能訓練を行うことを目的とした、認知症対応型通所介護が提供されることになった。

このように、現在の日本の高齢者福祉は、「介護をする」という観点から「介護を予防する」という観点に移行している傾向にある。

参考: (2006)介護保険制度改正の視点一介護保険法改正の経済効果分析—、厚生労働省、PP. 48-59 を参考に本文が作成

図1 現在の介護保険制度の仕組み

![図1 現在の介護保険制度の仕組み](image)
2. 研究の目的及び枠組み

本研究は、特にデイサービス利用者を対象に提供されるサービスとサービスに在する「楽しみ」の要素に注目して、介護サービスと楽しみの関係について事例を基に検討を試みるものである。

今後、高齢者のための福祉サービスの中心として、通所施設サービスが重要な役割を果たすのではなかろうかと考えた。また、サービスを提供する上で、高齢者はどこに楽しみを感じているかを理解することが、高齢者のプログラムへの深い動機付けや、高齢者自身が健康に向かって行動変容を起こしていく上で、重要な要因なのでなかろうかと考えた。

予防観念のサービスに移行したといえ、介護サービスの本質は「快適な生活」への支援である。主に、衣食住に関わる生活場面が快適となるようにサービスすることが、介護の重要な視点である。

楽しいという感情は、日常生活の様々な場面で得られる感情である。しかし、この楽しいという感情は、それぞれ感じ方や感じる状況を異にすると思うわれる。デイサービス利用者は、どのようなサービス提供場面で楽しみを享受したり、自らの活動の質に反対しているかを理解し、生活の質の高い介護サービスにつなげることへの寄与できるのかを考える。

本研究の枠組みは、デイサービスの開始時から終了時までの一日のスケジュールに沿って、利用者からのサービス提供場面で楽しみを感じているのかを調査し、個々のサービス提供場面の楽しみ度を把握することである。

また、デイサービスを利用する高齢者は、デイサービスの活動、人との交流、どちらを求める傾向があるのかを調査する。この2つの調査から、デイサービス利用者の楽しみの所在を明らかにするものである（図2）。

II. 「楽しみ」に関連する先行研究

これまでの「楽しみ」研究の1つにM.チクセントミハイ（M.Csikszentmihalyi,1979）が理論化したフロー（Flow）理論がある。フローとは、自分の能力と、これからの行動とする行為の難易度のバランスが絶妙に合っている時に楽しみを感じるという理論のことである（図3）。このフローは日常生活の時間を思いのフローが起こるとしている。また、チクセントミハイは、フローは「行為に没入している時に人が感じる感情」としている。

図3 フロー状態のモデル

小池（2002）は人間が生活を快適に過ごす上で「基礎生活」「社会生活」「余暇生活」の3つの生活がそれぞれに機能している時に生活の心地よさを感じるととしている。つまり、人間活動を快適にする「楽しみ」は、遊びや余暇生活の中にだけでなく、様々な生活場面で相互に関係しあいながら「楽しみ」感情が醸成されると考えられる（図4）。

図4 人間らしい生活
久野ら（2005）は、「楽しみ」感情は他者との豊かな交流によって生ずると指摘している8。
人見らの研究（2002）においては、疾病や ADL の低下が楽しみ活動を制限する傾向があると指摘している。また、同研究においては、デイサービスで人との交流場面があるのにも関わらず、疾病や障害の影響で「楽しみ」が制限されてしまうとの指摘もある7。

2 高齢者の楽しみについて
高齢者の楽しみを考える上で、「楽しみ」という要素のはかに「生きがい」や「生きがい感」という要素も深く関わってくる。

千葉は、高齢者の求める楽しさという感情の背景に生きがいという心理があるとしている。千葉が作成した生きがい援助者 PA-SR 評価スケールでは、生きがい感を居るがいを基本に４つのタイプに分類している8（図5）。

他者との交流（人との関わりによる仲間意識や会話の満足感）、②空間（場所、雰囲気への満足感）の３つの要素が考えられた。
しかし、楽しみを感じる条件・要因については、共通性もあるものの、その程度や発生要因には個人差があると考えられ、決して一応的ではないと思われる。

Ⅲ 研究方法

M 県 1 市に居住する通所施設、Y デイサービスセンターの利用者 17 名に、面接調査法にて聞き取り調査を行った。調査期間は平成 18 年 9 月 - 11 月までとした。
尚、本調査実施に際して、1 年前に通所適切度 Y デイサービスセンターへ赴き、利用者をスタッフと、活動を共にすることにより、面接調査のための信頼関係を築いた。
また、調査は利用者の体調やサービスの妨げにならないように配慮しながら実施した。

（1）調査 1
デイサービスにおけるサービス提供場面を、利用者の答えを送りまでにある 14 場面を想定した。それぞれのサービス提供場面で「楽しみ度」を 1 から 5 の尺度で設定し、聞き取り調査を行った。
聞き取り調査の内容を録音し、逐語録としてまとめた。その後内容から、デイサービスの各々サービスについて、「楽しみ」をキーワードに、「肯定的な発言」「否定的な発言」「その他」に分けて分類した。さらに、「肯定的な発言」の中から「楽しみ」の要素と思われるものを抽出した。
また、「否定的な発言」の中から、楽しみ感情を阻害すると思われる要因を同じく抽出した。

（2）調査 2
調査 2 は、千葉の生きがい援助者 PA-SR 評価スケールを基に、デイサービスにおける利用者の「楽しみの指向性」を見せる調査用紙を作成し、聞き取り調査を行った。質問項目は Personal Activity 開発指向（以下 PA 指向）6 項目、Social Relation 開発指向（以下 SR 指向）6 項目の合計 12 項目とし、1 から 5 の尺度に設定し、聞き取り調査を行った。
PA 指向とは、活動への知識や、技術の向上へ向けた指向のことである。SR 指向とは、人との交流へ向けた指向のことである。
これらの調査 1、調査 2 の結果から、総合的に利用者個々のデイサービスにおける楽しみの存在を明らかにし、デイサービス利用者の楽しみの構造や仕組みについて考察するものである。

図5 生きがい獲得過程の4タイプ

百瀬らの研究（2001）でも、高齢者は「居るがい（集うとそれ自体を求める傾向）」が楽しみにつながる効果があったとしている9。

潤井（2004）が行った高齢者へのインタビュー調査において、高齢者が保健福祉サービスに求めるものとして、自分の生きがいや楽しみとなる趣味活動、社会参加、人との交流、生活習慣への取り組み、役割の存在は日常生活を送る上で重要であるという意見が述べられている。また、弱い・要介護高齢者は、デイサービスなどのサービスの利用を通じて、生きがいや楽しみにつながっている特徴が示されたとしている10。
IV. ヤデイサービスセンターについて

今回調査したヤデイサービスセンターは、M県1市にある適所施設である(表1)。施設開設から2年目で、週に6回(月曜日から土曜日)サービスを提供している。1日の最大利用者数は15名で、介護保険法の位置付けでは小規模型となっている。

| 表1 ヤデイサービスセンターの概要 |
|------------------|------------------|
| 機関名:ヤデイサービスセンター | 市名:市名 |
| 雇用機関:市名 | 市名 |
| 利用者数:30名 | 30名 |
| 職員数:5名 | 5名 |
| 開放時間:9:00-17:00 | 9:00-17:00 |
| 関連事項:無料電話:0123456789 | 無料電話:0123456789 |
| 事業内容:利用者の相談・訪問介護 | 利用者の相談・訪問介護 |

ヤデイサービスセンターでは、デイサービス事業のほかに、訪問介護事業を行っている。職員の構成は管理者1名、生活相談員1名、看護師2名、機能訓練員(看護職員兼務)1名、介護職員2名の計7名で運営されている。

V. 結果

ヤデイサービス利用者のうち、17名に調査を行った(表3)。調査を行った17名の介護度は、要介護3が3名、要介護2が1名、要介護1が2名、要支援2が1名、要支援1が6名で、経過的要介護者が1名である。また、要介護認定の変更が1名、施設のプログラムに参加している同年齢の非該当高齢者3名についても同様の調査を実施した(表4)。年齢の分布は、90歳以上の利用者が1名、80-89歳の利用者が9名、70-79歳の利用者が6名、69歳以下90歳の利用者が1名である(表5)。

| 表3 利用者の介護度 |
|------------------|------------------|
| 要介護度 | 年齢 | 調査1 |
| A | 要介護3 | 84 | 0 |
| B | 要介護3 | 77 | △ |
| C | 要介護2 | 87 | 0 |
| D | 要介護1 | 85 | 0 |
| E | 要介護1 | 84 | 0 |
| F | 非要介護 | 90 | 0 |
| G | 要支援1 | 73 | 0 |
| H | 要支援1 | 70 | 0 |
| I | 要支援1 | 88 | 0 |
| J | 非要介護 | 84 | 0 |
| K | 要支援1 | 86 | 0 |
| L | 要支援1 | 78 | 0 |
| M | 非要介護 | 69 | 0 |
| N | 非要介護 | 71 | 0 |
| O | 非要介護 | 84 | 0 |
| P | 非要介護 | 73 | 0 |
| Q | 要介護3 | 86 | X |

| 表4 介護度別の人数 |
|------------------|------------------|
| 要介護 | 人数 |
| A | 1 |
| B | 1 |
| C | 1 |
| D | 1 |
| E | 1 |
| F | 1 |
| G | 1 |
| H | 1 |
| I | 1 |
| J | 1 |
| K | 1 |
| L | 1 |
| M | 1 |
| N | 1 |
| O | 1 |
| P | 1 |
| Q | 1 |

| 表5 年齢別の人数 |
|------------------|------------------|
| 年齢 | 人数 |
| 90歳以上 | 1 |
| 80-89歳 | 9 |
| 70-79歳 | 6 |
| 69歳以下 | 1 |

1. 調査1

(1) サービス提供場面毎の利用者の楽しみ度の調査

調査1は、送迎(迎え)、バイタルチェック、水分補給、入浴、体操、トイレ、食事、昼寝(仮眠)、職員との会話、利用者同士の会話、レクリエーション、おやつの時間、送迎(送り)、季節の行事(イベント)の14項目について調査を行った。楽しみ度は5に近いほど楽しみ度は高い。

それぞれのサービス提供場面における楽しみ度の平均は、高い順に、入浴5.0、食事4.9、おやつの時間4.8、季節の行事(イベントなど)4.8、職員との会話4.7、利用者同士の会話4.7、レクリエーション4.6、体操4.5、送迎(送り)4.4、迎え4.3、昼寝(仮眠)4.2、トイレ(排泄)4.0、水分補給3.9、バイタルチェック3.4となった(表6)。

Yデイサービス利用者は、ほぼ全てのサービス提供場面で楽しみ度の平均が4以上であり、サービスに対する楽しみ度は高い。また、サービス提供場面ごとに大きな差は見られなかった。

しかし、バイタルチェックが3.4、水分補給が3.9、トイレが4.0であり、これらの項目の楽しみ度は、他の項目よりもわずかに楽しみ度が低い結果になった。
表6 利用者の楽しみ度の調査結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目1</th>
<th>項目2</th>
<th>項目3</th>
<th>項目4</th>
<th>項目5</th>
<th>項目6</th>
<th>項目7</th>
<th>項目8</th>
<th>項目9</th>
<th>項目10</th>
<th>項目11</th>
<th>項目12</th>
<th>項目13</th>
<th>項目14</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>E</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>F</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>G</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>H</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>I</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>J</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>K</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>L</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>M</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>N</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>O</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>P</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図6 肯定的発言からの「楽しみ」要因

図7 肯定的発言からの高齢者の不安要因

これらの要素の中でも、人に関する要因で、ほぼ全ての利用者が、皆と一緒に何かをするということ、会話をするということの何れかを、もしくは両方の行為、体験から楽しげを感じていることが分かった。

また、「空間」に関する要因では、デイサービスに来ること自体に楽しみを感じている利用者が多く存在した。

「サービス・アクティビティ」の要因では、14項目で用いた楽しみ度がそれぞれに高いことに同調する形で、利用者個々の捉え方などは異なるものの、それぞれのサービス提供面での楽しみの要因が確認できた。

また、否定的な発言から、高齢者の楽しみ感情を阻害すると考えられる要素を抽出すると、「健康に対する不安」、「孤独感」、「生きがい感の喪失」の3つの要素に分けられた（図7）。

「健康に対する不安」では、それぞれの利用者が抱える疾病や障害への不安という要因が抽出された。

「孤独感」では、1人できることで不安、家庭で話が少ない、ほとんど家族から出ないということが抽出された。
テイサービス利用者の楽しみに関する研究

表7 PA指向・SR指向の調査結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>訪問1</th>
<th>訪問2</th>
<th>訪問3</th>
<th>訪問4</th>
<th>訪問5</th>
<th>訪問6</th>
<th>訪問7</th>
<th>訪問8</th>
<th>訪問10</th>
<th>訪問11</th>
<th>PA指向</th>
<th>SR指向</th>
<th>全合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>18</td>
<td>21</td>
<td>42</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>36</td>
<td>36</td>
<td>72</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>20</td>
<td>24</td>
<td>44</td>
</tr>
<tr>
<td>E</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>F</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>24</td>
<td>24</td>
<td>48</td>
</tr>
<tr>
<td>G</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>24</td>
<td>24</td>
<td>48</td>
</tr>
<tr>
<td>H</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>18</td>
<td>18</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>I</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>J</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>K</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>L</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>M</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>N</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>O</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>P</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>Q</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>R</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>S</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>T</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図8 Yテイサービスセンター利用者のPA指向・SR指向の平均

「生きがいの感の喪失」では、これからの何かをしたいという気持ちなんて起きない、楽しみなんてないということが出された。

PA指向・SR指向の調査は、PA指向とSR指向の観点で、「楽しみ」の所在を分析する試みを行った（表7）。

質問項目はPA指向6項目（訪問1－6）、SR指向6項目（訪問6－12）の合計12項目で、1から5段階で評価を行った。

調査2の結果から、PA指向・SR指向の平均は17.4、SR指向得点の平均は8.6だった。利用者全体の平均から傾向を見れば、5人と交流指向にあたるといえる（図8）。

PA指向・SR指向それぞれの得点を合計し、座標として示し、利用者の分布を見た（図9）。PA指向・SR指向の最低点数は6点、最高点数は30点である。千葉の生きがい獲得過程の4タイプを参考にし、居るからタイプを基本に、活動タイプ、人・交流タイプ、活動＋人・交流タイプに分類した。

結果は、居るからタイプと、活動＋人・交流タイプに分かれた。また、利用者の中に活動だけを求めている人や、人との交流だけを求めているといった、極端な偏りのあるタイプは見られなかった。

207
VI. 考察

今回、高齢者のデイサービスに対する楽しみについて、デイサービス利用者の楽しみ度、遂果論、PA指向・SR指向の観点から評価を行った。その結果、高齢者が個人的知識・技能の向上や、人間関係の交流など、また生き方が、健康という様々な要素が相互に作用し合って、
「楽しみ」を享受しているということが理解できた。

各サービス提供場面による楽しみ度の観点から考察すると、ディサービスセンターのほとんどどの利用者が、
デイサービスで提供される様々なメニューに対して楽しめることが分かった（表8）。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表8 14項目の楽しみ度の平均</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>1. 参加（週末）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. バルチャネルチェック</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 食事補給</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 入浴</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 体操</td>
</tr>
<tr>
<td>6. トレーニング（独立）</td>
</tr>
<tr>
<td>7. 食事</td>
</tr>
<tr>
<td>8. 洗髪（仏胃）</td>
</tr>
<tr>
<td>9. 眠りの時間</td>
</tr>
<tr>
<td>10. 利用者の会話</td>
</tr>
<tr>
<td>11. レクリエーション</td>
</tr>
<tr>
<td>12. おやつの時間</td>
</tr>
<tr>
<td>13. 道路・交通</td>
</tr>
<tr>
<td>14. 季節の行事（イベント）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

しかし、血圧測定や、トレーニング・読書では、他のサービスメニューほど、楽しみを感じるには至っていない。
これは、ディサービスセンターの利用者が、比較的ADL（日常生活動作）が高く、これらの普段の日常生活を、そのために困難を有する利用者が少なかった之があると考えられる。また、入浴の楽しみ度が高かったのは、サービスを受ける利用者の自宅の浴室では、腰が曲げられていて、入れ込みなどの構造上の問題点や、疾病による制限があり、困難を有するものの、ディサービスセンターでは、ハード面における快適性から楽しみ感情が強く誘発されていたと考える。

これらのことは、ADLの状況や、自宅での生活環境によって、楽しみの程度や、表2に差が出てくることを示唆しているものと思われた。つまり、ADLの困難な状況が、自宅とは異なる、対称的な、ディサービスの良好な状況や、環境に身を置くことで楽しみ感情が体験しやすくなるのではないかと推測する。

利用者の肯定的家族の観点から、皆と一緒に何かをするということと、会話をするという、人と交流するという点を顕著にディサービスを利用していることが分かった。また、ディサービスに来ること自体に楽しみを感じている人や、その場所に集まって皆で何かをするということを好む傾向にあるということを理解できた。ディサービスを福祉目的ということは、交流の場として利用している利用者がいることが推察できる。人と関わることとの楽しげや、他者から認識されていることの安心感から得られる快か、楽しみと混在している。職員が親切であること、話を聞いてもらえる人がいるということと、自宅では行えないことを助けてもらえることが良いといった「親切な対応」に、楽しみ感を訴えているのはこのためだろうと思われる。

否定的な観点からは、「健康に対する不安」や「孤独感」、「生きがいの喪失」などという要素が、利用者の生活の中で、もしくは潜在的な意識の中に存在するかつ分かった。ディサービスを利用するのは、これらの不安や心配からの、一時的な回避という目的意識が存在するのかもしれない。肯定的な観点の中に見られる1つ1つ1つ要素は、本当に利用者の生活にある不安や心配の対極にある、願いや希望と同調するものだと思われた。

PA指向・SR指向の観点から見た結果、居るかたいティブの利用者とは、活動＋人・交流タイプの利用者とは分けられていた。これは、個人差はあるものの、活動の知識や技術の向上と、人との交流のどちらか一方だけを求めてディサービスを利用しているという利用者は、ディサービスセンターの利用者の中では少なかったということである。ディサービス利用者がディサービスに求めるものは、自分自身の活動への知識や技術の向上のみではなく、人・社会の交流がバランスよく含まれているということがディサービスにおける楽しみの要因になっているのではないかと考えられた。

また、PA指向・SR指向のどちらの観点も低い利用者であっても、調査の1の楽しみ度、遂果論から、活動することか、ディサービスに来ること、その場に参加することと自体を楽しみにしているということが分かる。ディサービスに明確に高い目的がないと思われる利用者がディサービスに求めるものは、「仮は何をする」という「居るかたい」と求める部分が潜在的な目的として多くの部分を占めているようと思えた。

フローの観点から利用者の楽しみを考えてみると、「他者との交流を目的にディサービスに来ている」という発言も見られるから、自分自身がその行為に没入するというフロー的楽しみ感をいうよりも、皆で何かを行うことと、自分と自分以外の他者との関係性の中で、自分の存在を確認することができたことによる安堵に似た楽しみ感があることについても理解できた。共通の活動から得られる共通の快体験が楽しみ感情を生み出す安定した環境をつくりだしていると思われる。

これらの結果を踏まえて、ディサービスにおける利用
者の楽しみについて考えると、フローの概念による楽しみ感情というよりも、自分と他の利用者や、職員との相互の関係性の中で、楽しみ感情が誘発されているのではないかと感じた。このような他者との関係の中で、利用者は、自分自身の存在の確認や安定感、また共通の快体験、健康感、生きがい感などの、様々な要因が楽しみ感情を共有し、楽しみ感情が混同しているのではないかと考える（図10）。

図10 デイサービスにおける高齢者の楽しみ

Ⅶ. 終わりに

本来のデイサービス事業の制度上の目的は、利用者の健康を維持するとともに、社会的孤児感の解消、介護を行っている家族の負担軽減を目的としている。今の、Yデイサービス利用者がデイサービスに求めていることに、サービスによる身体の状態の改善だけではなく、どちらかというと人との交流や、仲間との交流ということを主な目的として、デイサービスに参加している利用者が多いことが分かる。また、その場に居ること自体を目的としている利用者が多いこともわかった。

デイサービスのサービスを考える時に、利用者の様々なニーズから具体的な身体介護やレクリエーション的なアクティビティが選択される傾向も少なからず見受けられるが、実は「楽しみ」という視点で改めてデイサービスの目的があり方を考えると、デイサービスは、利用者がただ何となく集まるだけの空間が存在するだけでも、大きな役割を担うことが可能であるように感じた。制度上の目的も、この「集まる」という環境の整備が基本にあるのだと感じた。

このように、「楽しみ感情」は、デイサービスにおいても、様々な状況で享受できる感情であり、「人」との相互作用が快適な生活を送れる上で、「楽しみ感情」が表現に重要な役割を果たしている。しかし、人生の終末期にあるデイサービス利用者の「楽しみ」を研究するにあたっては、「楽しみ」と周辺にある「生きがい」や「アイデンティティ」のような概念を混同した部分の解釈が今後の課題として考えられた。

また、今回の研究において、結果的に調査の対象が単一施設の高齢者のみになっている。高齢者の一般的な「楽しみ」研究にいたなかった点が、今後の課題として残った。

Ⅷ. 引用・参考文献一覧

1) (2006) 平成18年高齢社会白書、内閣府
2) 福部万里子（2005）【新盤】介護ビジネス実践ガイド、PHP研究所
3) 三菱総合研究所 ヒューマン・ケア研究グループ編（2006）図説福祉介護ハンドブック（第2版）、東洋経済新報社
4) M・チクセントミヒライ（1979）楽しみの社会学 不安と従来を超えて一、思潮社
5) 小池和幸（2002）実践福祉文化シリーズ第5巻 余暇と遊びの福祉文化、明石書店 41-53
6) 久野真矢・清水一・有本真由子・前川正雄・秋吉正広（2005）痴呆性高齢者の間で営まれる社会的交流に対する行動分析、作業療法24巻1号 60-70
7) 人見裕江・岩崎正子・中村陽子・小河孝則・敬博・郷木美恵・岡京子・徳山えみ・谷垣静子・宮本宏子・浦上克哉・稲光哲明・矢倉雄子（2002）地域で暮らしている痴呆性高齢者の生活の満足度、米子医学雑誌 53巻2号 79-89
8) 千葉和夫（1993）福祉文化ライブラリーフォーチャレンジエージェンシーのすすめ、中央法規出版 96-104
9) 百瀬由美子・浅原清美・大久保光子（2001）小地域単位の住民主体による高齢者健康増進活動の評価一参加者の主観的効果を評価指標として一、日本地域看護学会誌3巻1号 46-51
10) 浦田英子等（2004）保健福祉サービスにおけるエンパワメント環境の整備に関する研究一訪問面接とグループインタビュー一による当事者主体のニーズ把握一、日本保健福祉学会誌10巻2号 31-40